

The Bukkyo Ikkaku News Letter

# 仏教 企画 通信

第84号

発行日 令和8年6月1日  
 発行所 有限会社 仏教企画  
 〒252-0016  
 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
 Tel: 042-703-8641 / Fax: 042-782-5117  
 発行人 藤木隆宣  
 編集人 山河宗太 (OFFICE-SANGA)  
 Email fujiki@water.ocn.ne.jp

### ● 洞窟についての8つの詩句 ●

前回は引きつづき、現存する最古の仏典とされる『スッタニパータ』から、仏教の原点を学びます。すでに説明したとおり、『スッタニパータ』は全部で5つの章から構成されています。そのうちの第4章の「アッタカ・ヴァッガ(8つの詩句)」が最も早く成立したとみなされています。訳文は中村元『ブッダのことばスッタニパータ』(岩波文庫)から引用していますが、やや堅いかな古いかたと感じられる表現は、私の一存で、少し柔らかめに改めています。

第4章はいくつかの課題から構成されています。前回は「欲望」でした。今回は「洞窟」についての8つの詩句です。

この表題にある「洞窟」は身体をたとえています。詩句の中では、「窟」とも表現されています。「洞窟」も「窟」も、洞窟探検の愛好者はともかく、一般的にはあまり良い印象はありません。暗くて、ジメジメしていて、奥の方に何が潜んでいるかわからない、恐ろしい場所と

思われています。もし、その中に閉じ込められたら最後、簡単には出られそうにない場所でもありません。

私たちの「身体」は、そんな場所なのだ、とゴータマ・ブッダは説いているのです。そして、前回の「欲望」について、「洞窟」が説かれている理由は「洞窟」、つまり身体こそ、ゴータマ・ブッダの見立てによれば、「欲望」が育まれ蓄えられている場所にはほかならないからです。

このような原始仏典の「身体」に対して、曹洞禅では「身体」について、どう理解してきたのでしょうか。道元禅師の『正法眼蔵』「身心学道」から、解答を見出したいと思います。

それでは、本文を引用します。

窟のうちにとどまり、執着し、多くの(煩惱)に覆われ、迷妄のうちに沈没している人、—このような人は、それらから遠ざかり離れることがとても難しい。実に世の中にあるりながら欲望を捨て去ることは、容易ではないからである。

欲求にもとづいて生存の快樂にとらわれている人々は、解脱しがたい。他人が解脱させてくれるのではないから。かれらは未来にも過去にも思いを馳せながら、これらの(目の前の)欲望や過去の欲望をむさぼる。

かれらは欲望を貪り、熱中し、溺れて、吝嗇で、不正に慣れ親しんでいるが、(死ぬ時には)苦しみにおそわれて悲しみ嘆く—「ここで死んでから、わたしたちはどうなるのであろうか」と。

だから、人はここにおいて学ぶべきなのだ。世間で「不正」であると知られているどんなことであろうとも、それのために不正を行ってはならない。「人の命は短いものだ」と賢者たちは説いているのだ。

この世の人々が、様々な生存に対する妄執にとらわれ、ふるえているのを、わたしは見る。下劣な人々は、いろいろ

な生存に対する妄執を離れられないまま、死に直面して泣く。

(何ものかを)わがものであると執着して動揺している人々を見なさい。(かれらのありさまは)干からびて流れる水の少ないところにいる魚のようなものだ。これを見て、「わがもの」という思いを離れて、行動すべきなのだ。—いろいろな生存に対して執着することなく。

賢者は、両極端に対する欲望を制し、(感覚器官とその対象との)接触を知り尽くして、むさぼることなく、自責の念にかられるような悪い行いをせずに、見聞きすることがらに汚されない。

想いを知り尽くして、激流を渡れ。聖者は、所有したという執着に汚されることなく、(煩惱の)矢を抜き去って、つとめ励んで行動し、この世をも別の世をも望まない。

## 仏教とは何か 第3回

最古の仏典『スッタニパータ』から学ぶ仏教(2)

# 身体は敵か味方か

正木晃

● ゴータマ・ブッダの肉声が聞こえる ●

前回は述べたとおり、ゴータマ・ブッダはこのように、とてもわかりやすく、端的な表現で、説教していたようです。対機説法、すなわち相手の資質や境遇を考慮に入れたうえで臨機応変、相手が十分に理解できるように説教する名手だったからです。

最新の研究によると、『スッタニパータ』でも伝承の過程において、いわゆる編集作業がされているそうです。それでも、ゴータマ・ブッダが生前に発した肉声にもっとも近いのが『スッタニパータ』であることに、異論はありません。

ここで、詩句の意味について、少し解説しておきます。

「窟のうちにとどまり…」は、人は身体を持っていかぎり、執着や煩惱や迷妄から離れたいことを述べています。しかも、この世(俗世)は、身体を介して人を魅了する要素に満ちています。だから、出家しない、という話になります。

「欲求にもとづいて生存の快樂に…」は、「他人が解脱させてくれるのではない」と明確に述べられているとおり、自分を救うのは自分しかいないことを説いています。これは仏教の根本原理です。誰かが助けてくれるわけではないのです。セム型一神教(ユダヤ教・キリスト教・イスラム教)のように、全能の神がいて、信仰を持つ者を

を救ってくれるわけではないのです。仏教の原点が、いわば絶対自力の宗教だったことは明らかです。

「未来にも過去にも思いを馳せながら、これらの(目の前の)欲望や過去の欲望をむさぼる」という表現の背景には、インドで生まれた宗教が共有してきた輪廻転生という原理がありそうです。すなわち、生前の行為が次の生に影響するという発想です。仏教の用語でいえば、自業自得、悪因悪果・善因善果です。こういうことをすると、次の生では悪い境遇に生まれ変わるとわかっていても、目の前の欲望のみならず、過去の善行によって得られた現在の快樂までむさぼってしまう。それが人の本性だ、とゴータマ・ブッダは見抜いたのでした。

後続する詩句の「かれらは欲望を貪り…」も、「(死ぬ時には)苦しみにおそわれて悲しみ嘆く—「ここで死んでから、わたしたちはどうなるのであるか」とあるように、やはり輪廻転生が背景にあります。さらに、「この世の人々が…」の「死に直面して泣く」のも、「想いを知り尽くして…」の「この世をも別の世をも望まない」のも、同じく、輪廻転生が背景にあります。

「(何ものかを)わがものであると執着して動揺している人々を見なさい。(かれらのありさまは)干からびて流れる水の少ないところにいる魚のようなものだ」という描写は、ひ



のは、すべて身体なのです。この十方世界すべてが真実の人の身体(尽十方世界是箇真人身体)です。生死の去来するものが真実の人の身体(生死去来真人身体)です。この身体をはたらかせて、十悪を離れ、八戒を保ち、三宝に帰依して、家を捨てて出家するのが、真実の仏道を学ぶことなのです。

と、進んだり退いたりします。生死を頭と尾として、この十方世界すべてにほかならない真実の人の身体は、その身体を回転させます。身体を回転させると、1銭の大きさになり、微塵のなかにも入ります。平坦な大地が千仞の谷になり、千仞の谷が平坦な大地になるのです。

と、進んだり退いたりします。生死を頭と尾として、この十方世界すべてにほかならない真実の人の身体は、その身体を回転させます。身体を回転させると、1銭の大きさになり、微塵のなかにも入ります。平坦な大地が千仞の谷になり、千仞の谷が平坦な大地になるのです。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

の、まわがっています。生は一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。滅もまた一時の境遇であって、すでに前があり、後があります。こういうわけですから、生が来ればただこれが生だと向かい合ひ、滅が来ればただこれが滅だと向かい合ひなさい。…この生死はとりもなおさず仏のお命なのです。これを嫌がって捨てようとするならば、とりもなおさず仏のお命を失うことになりま。

じょうにリアルで、衝動的です。四季のある日本と違い、インドは夏季(3月から5月)と雨季(6月から10月)と乾季(11月から2月)の3季です。そのうち、もっとも気温が高くなる夏季には、なにもかもが渴ききってしまいがちで、「干からびて流れる水の少ないところにいる魚」がそこそこに見られるのです。

なぜならば、私たちは必ず身体を所有して、仏道修行もまた、坐禅をはじめ、身体なしでは実践できないからです。この難題中の難題を、真つ向から指摘する原始仏典があり、注目されてきた経典です。

「空でない状態」、つまり「何かがある状態」もしくは「何かが残っている状態」は、常に煩悩の原因になるので気をつけなさい、とさとしています。

「空でない状態」、つまり「何かがある状態」もしくは「何かが残っている状態」は、常に煩悩の原因になるので気をつけなさい、とさとしています。

「空でない状態」、つまり「何かがある状態」もしくは「何かが残っている状態」は、常に煩悩の原因になるので気をつけなさい、とさとしています。

「空でない状態」、つまり「何かがある状態」もしくは「何かが残っている状態」は、常に煩悩の原因になるので気をつけなさい、とさとしています。

「小空経」は、その経題からわかるとおり、原始仏典としては珍しく、「空」を最高の境地として設定し、そこに到達する方法について説いています。ただし、曹洞宗をはじめ、大乘仏教の根本理念となった「空」に見られるような、深遠な哲学的考察はまだ行われていません。

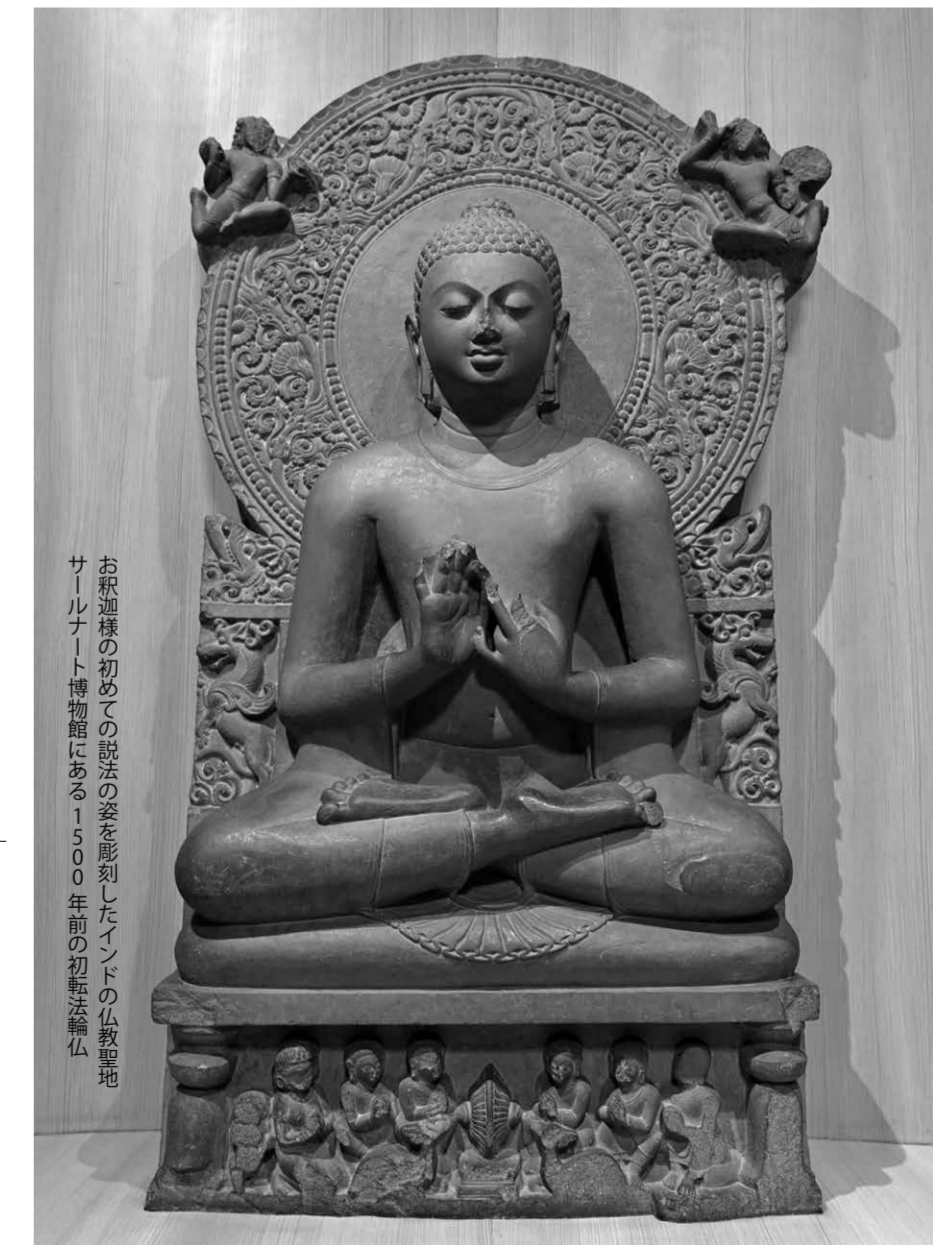
「小空経」の「空」は、文字とおり、「空」とか「空っぽ」という意味で使われています。わかりやすく言えば、「(そこに)ない」ことを表現しています。

「小空経」でゴータマ・ブッダは、思考や瞑想の対象が「空である状態」か「空でない状態」かを、きちんと見分けることが大切だと説いています。そして、

「小空経」でゴータマ・ブッダは、思考や瞑想の対象が「空である状態」か「空でない状態」かを、きちんと見分けることが大切だと説いています。そして、

「小空経」でゴータマ・ブッダは、思考や瞑想の対象が「空である状態」か「空でない状態」かを、きちんと見分けることが大切だと説いています。そして、

「小空経」でゴータマ・ブッダは、思考や瞑想の対象が「空である状態」か「空でない状態」かを、きちんと見分けることが大切だと説いています。そして、



お釈迦様の初めての説法の姿を彫刻したインドの仏教聖地 サールナト博物館にある1500年前の初転法輪仏

# 未曾有の震災から15年 行動と継続が 福島県を救う

長秀院住職 渡辺祥文

宗派関係の出張・打合せがあり東京のホテルのラウンジで、待ち合わせをしていた。聞き耳を立てていたわけではないが、隣の50代と思われる2人の女性の会話が聞こえてきた。食事や食品、グルメ紀行の話であった。話が進むうち東北の話題に移ったところでひとりが声を潜めるように言った。「なんだかんだと言っても、やっぱり福島はダメよね。だってそうでしょ。放射能ですもの」。もうひとりがこれに頷くように答えていた。「そうよねえ。原発事故から15年っていうけど、わざわざ食べたりしないわ、無理よ」。その後この話題が続いた。隣に福島の間があることがわかっていたら、彼女たちもそんな言葉は口に出さなかったであろうが、まさに個人の本音、多くの人々の心にある声を聞いているようで辛いものがあった。震災時、5歳だった幼児は20歳となり、その時の中学生たちは30歳前後となっている。そのなかで結婚を控えた女性の方が福島で生まれ育ったのだが、相手の親に「福島で放射能を浴びたのでしょ。子どもに影響は出ないの」と聞かれたという話もある。全国の全ての人々に、東日本大震災と東京電力福島第一発電所事故の実態や、これまでの経過とその努力を、被災者の視点で理解してほしいという願望に無理があるのはわかっている。福島も私たちも多くの支援を賜り、今もたくさんの方々に寄り添っていただいている。ただただ、感謝である。しかし、現在も継続的に15年間、多くの苦悩や課題が山積しているのもまた事実である。

平成23年、震災から3カ月後の6月中旬、地元の公民館(福島では「学習センター」と呼称する)から「任職さん、いつもの子供たちの夏休みの坐禅会は開催されますか?」という電話が入ったのだが、正直戸惑った。当時は原発事故の放射性物質の降下により、必要以外の時は屋内で息をひそめるよ

# 果てしない「妖怪学」の旅路

前編

## 過去と未来をつなぐ「媒介者」としての歩み

令和7年に文化勲章を受章した小松和彦氏。恩師・佐々木宏幹先生の3回忌法要の席で語られたのは、過去から未来へと途切れた文化をつなぐ「媒介者」として歩み続けた、果てしない探求の軌跡だった。

文・山河宗太

### ■プロローグ 恩師の思い出と受章の戸惑い

令和8年2月26日、東京グランドホテル(曹洞宗檀信徒会館)において、導師・藤木隆宣(仏教企画代表・永正寺住職)により、長年にわたり宗教人類学や民俗学の分野を力強く牽引してきた佐々木宏幹先生の3回忌法要が厳かに執り行われた。その静謐な集いの席上において、ひとつの特別な講演会が催された。登壇したのは、国際日本文化研究センターの名誉教授であり、妖怪学の世界的権威として広く知られる小松和彦氏である。前年の11月に、文化勲章を受章するという日本において最高の榮譽に浴したの

である。同氏は昭和22年(1947)の生まれ。埼玉大学教養学部を卒業後、東京都立大学大学

院で社会人類学を専攻し、深く学問の道を進み始めた。その後、信州大学教養部助教授、大阪大学文学部教授を経て、国際日本文化研究センターの教授、さらには所長を歴任している。その研究の特筆すべき点は、文化人類学や民俗学を確固たる基盤としながらも、国文学、歴史学、宗教学などを幅広く柔軟に取り入れ、中世の深い闇に秘められた日本人の精神の原型を鋭く探求してきたことにある。

この度の文化勲章の受章は、文部科学省から発表された理由書によれば、大きく4つの観点から評価されたものである。第1に、妖怪という存在を徹底した実地調査(フィールドワーク)に基づいて研究し、学問的に体系化したこと。第2に、高知県の山間部に伝わる民間信仰である「いざなぎ流」を40年

の長きにわたり調査し、日本人の精神文化の深層を見事に解明したことである。「いざなぎ流」とは、四国山地の奥深く、旧物部村(現在の香美市)に伝わる独自の民間信仰を指す。陰陽道や修験道、神道などの要素が複雑に習合し、太夫と呼ばれる宗教者が古式の祭祀や呪術、祈禱を伝承している。正統な仏教の教義からはこぼれ落ちてしまいがちな、人々の素朴な死生観や霊性が色濃く残るこの民間信仰の実態を紐解いたことは、日本の宗教史の観点からも極めて意義深い。さらに第3の理由として、同センターにおいて約3万5000件にも及ぶ膨大な「怪異・妖怪伝承データベース」と、約4300件の「怪異・妖怪画像データベース」を構築し、共同研究を通じて次世代の研究者育成にも多大な貢献をしたこと。第4に、妖怪研究を日本文化の一大ジャンルとして国内外に知らしめ、国際的な文化発信において多大なる役割を果たした



荘厳な空気が漂う長秀院・本堂の内陣。きらびやかな天蓋(てんがい)が、静かに手を合わせる人々の心を包み込む。

からも、温かい言葉を頂いた。「住職さん、夏休みの子ども坐禅会は地域の人気行事です。から助かります。それから子どもたち全員が夏休みに避難するわけでもないと思います。これから地域の広報誌に掲載しホームページにも載せます」

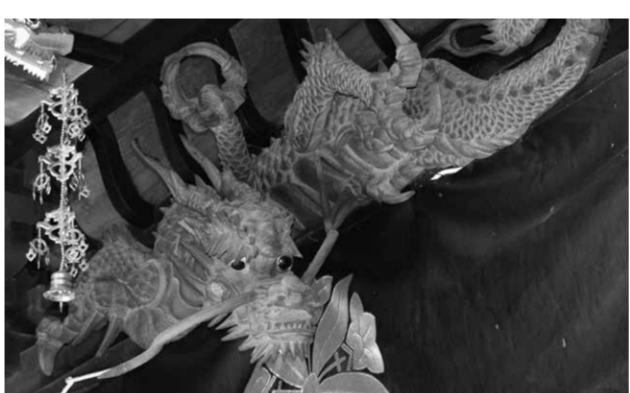
そして1カ月半後の7月中旬、担当者から電話を受けた。「坐禅会の申込者、20人を越えました。当日宜しくお願いいたします」。

当時子どもとはとにかく、放射線の被曝を避けるため長期休暇中は避難するという話であつた。低線量の被曝とはいえ、誰も経験したことのないことである。毎日蓄積される被曝量の結果に対する、子どもへの影響という問題については悲観

論も楽観論もあつたが、子どもものこととなれば最大の防御を行いたいと福島の人すべてが思つてた。

そして8月初旬の当日、野外を歩いて放射性物質を吸い込まないようにマスクをした子どもたちが25人集まつた。寺の中に入り、マスクを外し皆で大きな声で「おはようございませー!」と挨拶すると、安心したように笑顔が広がつた。毎日様々な我慢を強いられ自宅の屋内でじっとしていたのだと思

う。小学1年生から6年生まで、男女25人の顔を見てこちらも安心した。外で声を出して走り回ることではできないので(土埃等に放射性物質が積もっているため)、坐禅と写経の2時間となつた。



ただ、本堂や客殿で休憩時に動き回るいつもの子どもたちではなかつた。嬌声も上げず静かに我慢している日常が、染みついているようにも思えた。それでも寺の広い空間で夏休みが始まり、2週間がたち自宅にこもる中から久々の自宅外での集まりが嬉しそう

だつた。坐禅で改めて落ち着き、写経の時間になつた。子どもの集中力は大人を驚かせることも多いが、慣れない筆ペンを握り一心不乱に、見たこともなかつた般若心経を写している大人を励ます希望の光にも見えた。筆ペンをうまく使えず手が真っ黒になつていたり、高学年の子が低学年の子を手伝つたり、外界の苦悩が少し和らいだように思えた。

写経用紙の末尾には「為書き」の部分があるので、その功德を説明し「自分の成績が良

くなりそうですよ」とか、サッカーがうまくなりますようにとか、お願い事を書いていいよ。それから自分の大事な人の健康を祈るとかも良いね。自分で考えて書きましよう」と伝えた。ほどなく書き上げた写経を25人分本尊様にお供えし、読経して全員に返却したのだが、それぞれの為書きを見ているうちに涙が溢れてきた。小学5年生の女の子は「為原発事故が良くなつて、みんなが帰れますように。またみんながしあわせになりますように」と書き、他の高学年の子どもたちの多くも、そのように書いた。15年経つても、それぞれの為書きの文字が心に焼き付いている。子どももよくわかつて

いるのだ。帰りの時刻まで、教室の休み時間のように話に花が咲いたが、今も自分自身恥じていることがある。何気に「みんなはどこに行かないの? 避難とか考えているのかな?」と聞いてしまった。すると6年生の男の子が答えた。「うちはね、パパもママも働いてるんだけど、給料が2人で23万円なんだって。余裕がないんだよ。それから移住した人たちもいるけど、パパが転職するのは無理だつて。つまりお金の問題なんだ」。

他の子からも「うちもそうだよ。将来が不安だつて。避難できないんだよ」と。

子どもたちは良くわかつているのだ。社会的弱者という言葉があるが、高齢者も子どももその範疇にある。そこに経済的格差を加えると、大災害の影響は倍増する。放射能から自主避難したくても、ゆとりがなければできない。1度職を離れたら生活の設計ができない。自主避難しないのではなくできないのだ。そういうことも子どもたちは良くわかつているのだ。大災害は容赦なく過酷な現実をもたらす。

「昨年、あるご法事で20代後半と思える青年が、何か言いたそうに寄つてきてくれた。「平成23年の坐禅会、よく覚えてます。あの時の写経、うちの家族のお守りになってます。それから夏休みの行事は坐禅会だけだったので、うれしかったです。ありがとうございます」。

180センチを超える彼に挨拶をされて驚いたが、胸が熱くなつた。立派な好青年に成長していった。「あなたたちがいれば将来は明るい」とも思った。子どもたちに対する、教化行事は大切である。坐禅会も写経会も、学習塾(学習支援)も子ども食堂も大事である。コスパもタイパも悪い。地味で華やかでもない。しかし続けることが、行うことが使命であり、また種まきそのものなのだ。

ていた。生前強く提唱していた民衆の日々の暮らしや悩みのかに息づく「生活仏教」の視点から見ても、日々の法務や葬送儀礼を通じて人々の抱く素朴な霊性や死生観と直接向き合う寺院にとって、土着の民間信仰や憑き物の領域は、日本人の心の基層を深く理解し、仏の教えをいかに伝えていくかを考える上で、多くの気づきを与えてくれる領域でもあるのだ。

小松氏は折に触れて先生に電話をかけ、教えを請うていたという。多忙な恩師を気遣い、電話を3回鳴らしては切るという配慮を重ねつつも、大体2度目か3度目には電話に出てもらい、自らの考えを熱心に相談していた。そこには、どうし

ても恩師に自らの研究成果を聞いてほしいという情熱と、学問の道を切り拓く者同士の厳しくも温かい交流があつたのである。若き日から時を経たこの日の講演においても、法要の参加者に向けたものであると同時に、「先生にはぜひ聞いていただきたい」という彼岸にいる恩師への誇り高き、真摯な報告でもあつたのだ。

思いがけない受章の報せなぜこの私選ばれたかその彼岸の恩師へ捧げる最大の報告こそが、他でもない文化勲章の受章であつた。前年の10月7日頃、文部科学省からの突然の電話で受章の打診



妖怪学の研究で文化勲章を受章された小松和彦氏。

もとの様々な観点から研究する」と語るように、妖怪学は人間そのものを深く探求する試みとなるのである。人間の深層心理や業が投影された妖怪の役割を見極めることは、人類の文化史において欠落している部分を補う作業である。そして、その研究成果は単なる過去の記録にとどまらず、現代において新たな文化を生み出すための豊かな糧として活用されることを目指している。

このような前人未到の学問分野を切り拓く道のりは、決して平坦なものではなかった。妖怪を研究対象とすることに對して、冷やかな批判を浴びることも少なくなかったという。そうした逆風のなかで、小松氏が常に自らの支えとし、暗闇を照らす励みにしてきた言葉がある。それは、戦前の東京帝国大学の物理学者であり、随筆家としても名高い寺田寅彦氏が残した『化け物の進化』というエッセイの二節であった。

寺田氏はこのエッセイの中で、「人間文化の進歩の道程において発明され創作された色々な作品の中でも、化け物などは最も優れた傑作と言わねばなるまい」と高く評価している。化け物もやはり人間と自然の接触から生まれた創作であって、その出入りする世界は、一面では宗教の世界であり、また一面では科学の世界でもある。そして同時に、芸術の世界でもあると指摘したのである。

小松氏はこの化け物という

通俗的な言葉を妖怪と置き換え、自らの研究の確かな羅針盤としてきた。科学の光が及ばない領域において、人間が自然界の脅威や未知なる現象とどのように向き合い、それをいかにして宗教的な畏れや芸術的な表現へと昇華させてきたのか。寺田氏の慧眼は、そのまま妖怪学の核心を鋭く突くものであった。

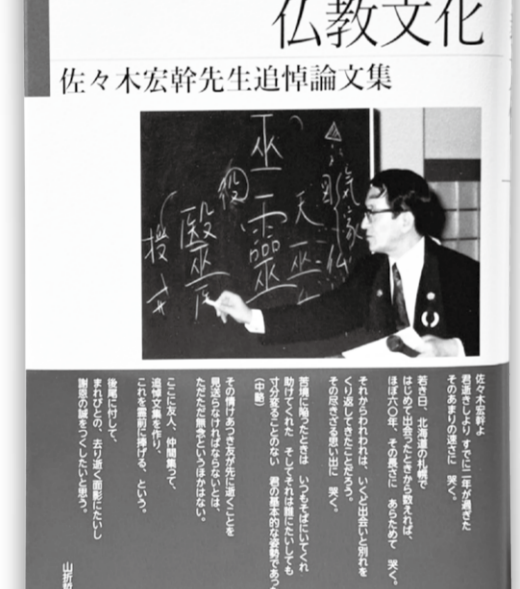
自然への畏怖と人間の想像力が交錯する境界領域。そこに生み出された妖怪という存在を真摯に読み解くことは、我々自身の心の奥底、すなわち尽きることのない煩惱や業を覗き込むことに等しい。恩師が提唱した「生活仏教」とは、教条的な理論にとどまらず、民衆の日々の暮らしや素朴な信仰心の中に息づく生きた仏教を見出す営みであった。日々の法務や相談事を通じて、目に見えない仏の慈悲や人々の抱える生々しい苦しみと向き合う寺院にとっても、人間の心を映す鏡としての妖怪学は、人々の心に寄り添うための、ひとつの温かな視座を与えてくれることだろう。文化と人間の本質に迫る、壮大な人間学の探求は、今この瞬間も続いているのである。

【後編は、次回85号に掲載】

令和8年12月末日までにお申し込みいただいた方は、送料無料！

# 佐々木先生関連書籍のご案内

佐々木先生 最晩年の3部作 ついに刊行



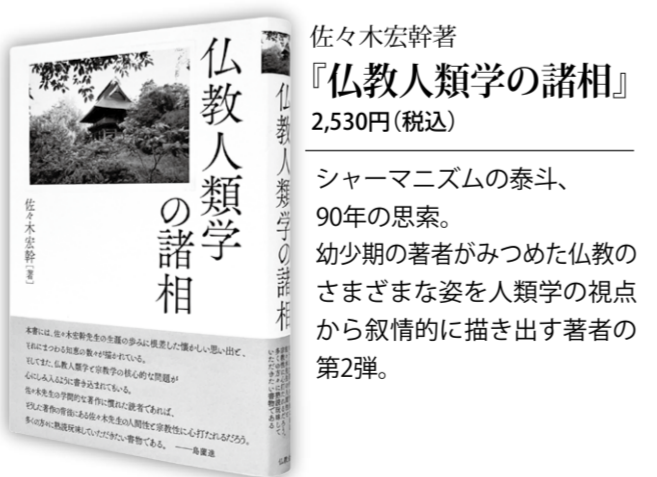
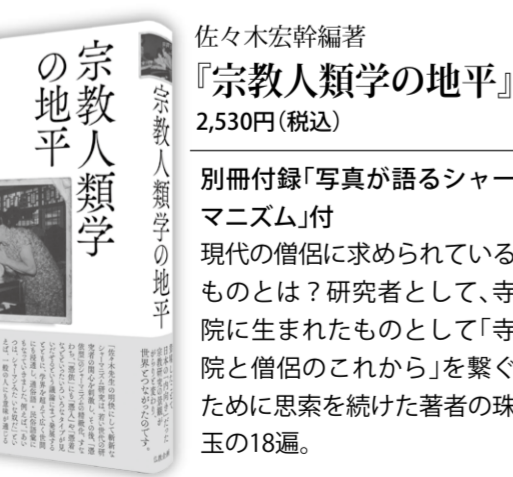
## 佐々木宏幹先生追悼論文集 『民俗宗教と仏教文化』

定価 3,850 円 (税込) | 仏教企画発行

現代社会において必要不可欠な「生活仏教」を研究し、その浸透に多大な貢献をされた佐々木宏幹先生。惜しまれながら 2024 年に他界されてしまった先生を偲び、その研究と教えについて、同朋たちが論文を寄せ、その功績の集大成をここに完成させた。

このたび仏教企画より刊行されました『民俗宗教と仏教文化』(佐々木先生追悼論文集)は、佐々木宏幹編著『宗教人類学の地平』、佐々木宏幹著『仏教人類学の諸相』と合わせて佐々木先生三部作を成す最後の書籍となります。

佐々木先生とご親交のあった方々、あるいは佐々木先生の学問にご興味のある方々は是非ご購入いただきたく、ご案内いたします。



**特別割引**

既刊を含めた 3冊ご購入の場合 (組み合わせ自由) **10%割引!**

一般の書店では取り扱っておりませんので、仏教企画に直接お申込み下さい。  
 ■お申込みはこちらから 仏教企画ホームページ <https://www.bukkyo-kikaku.com/index.html>

### ■評価された業績と「新しい妖怪学」の提唱

国家から評価された業績 新たな妖怪学を提唱する

文部科学省から報道関係者に向けて配布された文化勲章の受章理由書には、実に多岐にわたる功績が詳細に記されていた。記載内容の全体のうち、おおよそ3分の2が妖怪学に関する学術的評価であり、残りの3分の1が高知県の山間部において40年もの長きにわたり実地調査を続けた民間信仰「いざなぎ流」に関する評価であったという。この「いざなぎ流」との出会いと、長年にわたる過酷な実地調査の蓄積は、目に見えない精神世界を学問的に体系化する上で決して欠かすことのできない重要な基盤となった。土着の民間信仰の実態を解明することと、妖

怪学という新たな学問を創出すること。それはまさにコインの裏表であり、日本人が古来抱いてきた素朴な畏れや祈りの形に、学問の光を当てて浮き彫りにする壮大な作業に他ならない。しかし、これほどまでの国家的な評価を前にしてもなお「私としては、妖怪に関してもいざなぎ流に關しても、まだまだ十分な自分なりの研究成果を上げてはいないと思っ」と、小松氏はどこまでも謙虚な姿勢を崩すことはなかった。

では、いまだ道半ばであると言語その歩みのなかで、一体何を成し遂げてきたのか。最大の功績は、間違いなく新しい妖怪学の提唱にある。かつては単なる趣味や好事家の集まりと見なされがちであった妖怪研究を、確固たる学問分野へと押し上げたのである。

この前人未到の新しい学問において重視された視点は、大きく2つ存在する。ひとつは妖怪を単なる非科学的な迷信から解放すること、そして2つ目は、妖怪に現代の文化資源としての価値を積極的に見出すことである。自身の著書である『妖怪学新考』の中国語版が出版されるにあたり、そこに寄せた文章のなかで、新たな妖怪学の宣言とも呼ぶべき見解が極めてコンパクトにまとめられている。その思想の中核をなすのが、「妖怪は文化である」という力強い定義である。近代以降の日本が、仏教や神道

的に確立していく過程。そのなかで枠組みからこぼれ落ちた土着の信仰や不可思議な現象は、しばしば迷信や俗信という言葉でひとくくりにされ、社会から排除される傾向にあった。妖怪もまた、非科学的な妄想の産物として、長らく学問の対象からは外されてきた歴史を持つ。しかし、目に見えない霊的な存在や、人間の知恵を超えた理不尽な現象に対する畏怖の念は、仏教が説く因果の理法や死後世界の観念、あるいは人々の抱く根源的な苦しみとも、底流において深く結びついているのである。

妖怪は人間の心を映す鏡 人間学としての探求進む

小松氏が提唱する新しい妖怪学とは、不可解なものを単なる迷信として葬り去るような浅薄な学問ではない。妖怪について「人間の想像力が生み出した奇妙な、すなわち現実の世界ではあり得ない不思議な姿をした、時には姿さえも見えない、また時には恐怖さえも与える存在である」と明確に定義している。

それらは決して過去の遺物などではない。「妖怪は過去だけではなく現在も至るところに存在している。神話伝説のなかに、あるいは小説や演劇、絵画、さらには映画、アニメ、ゲーム等のなかに」と指摘するよう、現代においても形を変え、メディアを変えて生き続けているのである。

なぜ人間は、これほどまでに執着して妖怪を生み出し、語り継いできたのだろうか。そこには自然と人間、あるいは人間社会や人間同士の間にある、根源的な畏怖の念や善悪の観念が複雑に込められている。自然災害や疫病といった理不尽な災厄を前にした時、人々はそれを何らかの意志を



佐々木宏幹先生の3回法要で導師をつとめる藤本隆宣師

持つ存在として形を与え、名前をつけることで、名状しがたい恐怖や不安を乗り越えようとしてきたのだ。愛憎や嫉妬といった人間の業の深さが、怨霊や妖怪を生み出す背景となることも少なくない。

だからこそ「妖怪を迷信として葬り去るのではなく、人間の心を映す鏡として捉え直し、人間学という大きな枠組みの

編集後記

藤木隆宣

日本社会における寺院の未来

寺院はこれから、日本社会の中で生き残ることが出来るかどうかという問題は私たち寺院住職に立ち塞がる重い課題だ。

私は昭和38年に駒大仏教学部に入部し、サークル活動は児童教育部(見教)を選んだ。当時は大学の中に竹友寮があり約300人が入寮していた。6班に分かれた寮生活は、田舎から上京してきた私たちをうまく受け入れてくれた。生まれも育ちも違う全国各地から集まった若者たちが、違和感なく溶け込めたのも、今思えば不思議なぐらいだと感心する。現在82歳の私にとっては、64年前のことなのだが昨日のこのようににはつきりと覚えている。

見教に入部したのは、寮の友人が「見教に入るといいぞ」と言っていたのを聞いたからだ。当時はたしか12の日曜学園があり、興味があった私もそのひとつ「中野区の保善寺日校」に入った。見教には120人ほどの部員がいたが、この日校でもガリ版刷りの「日校だより」を発行していたと記憶する。地域の子ともたちにむけた日曜学園では、奏でたことがないピアノ、オルガンを片手で弾いたり、本堂では、お参りの司会や仏教聖歌を歌ったりして4年間を過ごした。

また、夏には夏季巡回があり約1カ月間にわたって、北海道や東北そして、関東地方を巡った。いずれの班も3〜4人で1組となり、それぞれが全国12カ所のエリアにある曹洞宗の寺に1〜2泊、お世話になりながら活動をしたものだ。宿泊先の寺院がお声がけしてくださった

保育園や幼稚園、小学校から中学校、そして夜には盆踊りやフォークダンスをご婦人や青年たちに教えたことが、生涯忘れられない思い出となっている。

今思えば、あの時代はまだ、寺院が社会の中で機能していた。長い歴史を持つ見教が、大学における部活から姿を消したのは、平成になり詰め込み教育と熾烈な競争社会への変化から子どもたちの教育の場が塾へと移ったから。その結果、学生は見教を選ばなくなり、日曜学園は全て無くなってしまった。

私はこれまで、「曹洞禅グラフ」(昭和57年から発刊、現在177号)と「仏教企画通信」(現在84号)を発行し続けてきた。私も住職となり葬儀の導師をするようになったが、この20年間あまりの経験は、さまざまな社会勉強になったと思う。たとえば昭和の時代、葬儀とは人が亡くなれば当然するべき行事だった。ところが現在都会では、直葬が著しく増えており、実に5割近い数まで膨れ上がっている。まさにこれが仏教・寺院離れの要因のひとつに数えられるのではないかと。つまり、寺に頼まなくてもいいんだと言う風潮である。

と感している。京都にある龍谷大学では、仏教関係学科の改変を考えているようだ。それは「社会応用領域」の創設からうかがえる。別の宗派ではあるが、常に次のことを考えられているのは、浄土真宗本願寺派だと私は感じた。

こうした風潮がはびこり始めた今、これからの仏教(寺院)はどう生きるかという問題に直面していると言わざるを得ない場所を選ばず、民衆に当てにされない寺院は生き残れない。つまり、当てにされる寺院を目指して何かを始めることが急務なのではないか。そして、そのヒントは、社会とどう向き合うかだ

こうした状況下において、時間というものは残酷であり、どのような対策も効果的なのかどうかは正直わからない。ただ、今の世相を観たときに、佐々木宏幹先生が提唱された「生活仏教」こそ、過酷な社会を生きる上で何よりも大切と言えることは間違いない。そして、先人となつてしまった私たちにできることは、これを実践していける僧侶の育成を考えなければならぬということだ。そうしなければ、社会の中で活躍できる宗門人は、今後育たないのではないかと。内部にしか伝わらない伝道を今も続けている宗門は、昭和の時代そのものであり、取り残されてしまう危険があると感じる。令和の世になった今、宗門人のあり方について、今一度振り返って考え直す必要がある。

2026 秋・彼岸号 178 曹洞禅グラフ

特集 檀信徒に聞く 難病と向き合った 闘病生活

2026年9月1日 刊行予定

「修証義」解説 ●丸山劫外=著 1,400円★  
葬送のしおり ●長井龍道=著 30円  
〈修証義読本〉生老病死 ●須田道輝=著 500円★  
曹洞宗檀信徒経典 ●須田道輝=解説 300円★  
〈曹洞宗檀信徒必読〉供養のすべて ●霊元文法=著 140円★  
〈曹洞宗檀信徒必読〉葬儀のすべて ●霊元文法=著 150円★  
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円  
観音の咒 大悲心陀羅尼 ●渡辺章悟=著 500円  
宗教人類学の地平 ●佐々木宏幹=著 2,300円  
仏教人類学の諸相 ●佐々木宏幹=著 2,300円  
民俗宗教と仏教文化・佐々木宏幹先生追悼論文集 3,500円

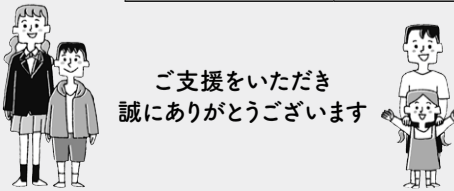
※ 価格はすべて税別価格です。(★印のものは部数により割引があります)  
※ 『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。  
同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

寄附者御芳名(敬称略)

令和8年2月1日~5月1日

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名/個人名(回数), 金額. Includes entries for 神奈川県の青木義次 and 石川千恵子.

Table with 3 columns: 所在地, 寺院名/個人名(回数), 金額. Includes entries for 大分県の石川千恵子 and 妙高山 宗玄寺.



仏教企画発行の刊行物

Table with 2 columns: Title, Price. Lists various Buddhist publications and their prices.

お申し込み 株式会社 仏教企画 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5 Tel: 042-703-8641 Fax: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp